

●短編劇作品集

2 集

探偵小説 松本和子

招待状 湯川計伍

おこりんぼう 三原昇三

こぶとり異聞 土屋弘光

たそがれの譜 福田薫

チン・ジャラジャラ 神宮茂十郎

ズボンの穴 内木文英

渾沌七竅に死す はやし・こくど

青雲書房

短編劇作品集 2 集
定 価 750円
初 版 発 行 昭和50年 5 月20日
5 版 発 行 昭和 58 年 5 月20日
編 者 代 表 福 田 薫
発 行 者 川 原 昇
発 行 所 青 雲 書 房

東京都文京区大塚3—20—4

振 替 東 京 6 9 5 4 3 番

電 話 (03) 944—6 0 0 2 番

印刷・殖産堂 製本・山本製本

ISBN 4-88079-020-6

短編劇作品集

2 集

青 雲 書 房

はじめに

多幕物の劇が一幕物より秀れているという考え方は、全く、おかしい話です。短い詩が長い詩より文学的価値が劣るなどという話は聞いたことがありません。短い詩はそれなりに、作者の尖鋭な魂の断面がのぞかれるからです。

短い劇にも同じことが言えます。短いなりに、作者の眼がキラリと光って、人生の急所みたいなものを鋭く指摘しているからです。

私たちは以前から、一幕物の中でも、ごく短く凝縮された形のものが多いと思っていました。しかも、それは、教室でも、座敷でも、食堂の一隅でも、どんな所でもスペースがありさえすれば上演できる劇、それでいて、作者の精魂がこめられたもので、正式なステージでも当然上演できるような劇を考えていました。——そういう劇を何と名づけたらいいでしょうか。この作品集では無難に短編劇としましたが、——

こういう脚本がほしいというのは私たちばかりではありません。職場でも、学校でも、数多くの人々の声をききました。

ちょっと、何かの会合で、手軽にできる劇はないかと探すと、何も無い。仕方がないので、世話人にまかせておくと、器用な連中がでて、漫才やコントをテレビタレントを真似してやる。じょうずとか、へたとか評価するに至らない、見ている方が恥かしくなるようなものばかりだ。こういう時の脚本集みたいなものはないだろうか、と。

今回青雲書房のご好意で、この企画が軌道にのって、全国高演研有志各位のご協力を得てこの作品集をお手もとにお届けするはこびになり、こんな嬉しいことはありません。

この1、2集二冊の作品集は、十六名の高演研有志が精魂こめて書き上げた作品群です。作品をお願いする時に、編集意図は申し上げ、ご納得いただいた上で、ご執筆いただいたのですが、書きずらかったことと恐縮しています。謹んで、有志の先生方におわびとお礼を申し上げます。

この作品集は、それぞれの末尾に作者のことばがのせてあります。それを参考にして——といってもとられる必要はありません——のびのびとおやりください。

この作品集が皆様の学校で、職場で、クラスで、予餞会や、ホームルームの問題提起や、稽古用にお使いいただけたと思いますが、コンクールの上演台本としても十分、役に立つと思います。そして、サークルの、演劇部の、青年団のよきレパートリーとして蓄積していただければ仕合わせに存じます。

時節がらますますご自愛を祈ります。

一九七五年四月

へもくじ

探偵小説 松本 和子 セ

招待状 湯川 計伍 三

おこりんぼう 三原 昇三 七

こぶとり異聞 土屋 弘光 九

たそがれの譜 福田 薫 一〇三

チン・ジャラジャラ……………神宮茂十郎……………二三

ズボンの穴……………内木 文英……………一五

渾沌七竅に死す……………はやし・こくど……………一七

作者住所

上演許可願について

探偵小説

一幕

松
本
和
子

登場人物

田波

〃 〃 〃 〃 〃 〃

ヒロミ 千鶴 史子 道彦 京子 雄太郎 うめ

四〇才 六〇才 一七才 二〇才 四三才 五〇才 八〇才

場所

田波うめの部屋。うめは机の前にきちんとかしこまり、探偵小説を読んでいる。机の上、横などにもぎっしり探偵小説が積み上げてある。

つまり、彼女は、それに埋まっているような感じである。

うめは、髪もばさばさで身なりも汚ない。彼女は、家族のものからやつかいもの扱いにされ、あてがわれた一室に幽閉されている老人である。

うめは、本を閉じ、それが唯一の彼女の財産らしい古ぼけた時計を見る。

うめ
そろそろ、探偵小説の始まりだ。

うめは、立ち上り、後にある「薬」と「水差し」をとり机の上に置く。

うめ この薬を飲む。毒が廻って倒れる……うめき声を出す……史子がかけて皆に知らせる……と。うめき声はよほど大きくないと聞こえないな。ちょっと発声練習でもするか。(うめは、古い歌の一節を調子はずれに歌う)

史子が入ってくる。

史子 何よ、おばあちゃん。のんきに歌なんか歌って。本番五分前よ。

うめ、史子のことばが聞こえず、なおも声高に歌い続ける。

史子 聞こえないのね。(しばらく、うめを見ていたが) 何もこれなら薬で殺す必要はないわ。そーッと、後ろからしのび寄って、と。

史子、うめの後ろからしのび寄り、手で首をしめる。うめ、びっくりしてもがく。

うめ うわわわ……(史子をみて) 史子、お前……

史子 (手を離して) 冗談よ。冗談っていうより、おばあちゃんちとも聞こえないんだもの。毒殺じゃなくて、こういう殺し方もあるってわけ。

うめ、ほっとして息をつき、座り直す。

うめ だめだよ、史子。絞殺じゃ、本人の私に犯人がわかってしまうからね。私が倒れる。私の家族が駆けつける。それぞれアリバイを申し立てる。そこで私が立ち上り(立っ

て、史子を指さす）お前が犯人だ！

史子 あ、あら、私は発見者よ。

うめ 発見者だってわかるものかね。ちょうどゆうべ読み終わった、ディクソン・カーの「赤後家の殺人」てのも初めに駆けつけた奴が犯人だったんだ。筋書きを作るのは、道彦の役だろう？ あの子は私のところからちよいちよい探偵小説を借りてったからね。案外、発見者を犯人に仕たてているかも知れない。

史子 ちがうわ、おばあちゃん、ちがうわよ。私、絶対に犯人じゃない。誓うわ。私、いやよ、いくらお芝居だって犯人なんかになるの。第一、私には動機がない。私はおばあちゃんの味方だわ。本当にうちの家族ったら、年寄りをこんな部屋に閉じこめちゃってまるでやっかいもの扱いなんだから。おばあちゃんが探偵小説きちがいなのをいいことに、探偵小説さえあてがっておけばいいなんて勝手に勝手に決めこんじゃってさ。でも、この頃、本の値段も上ったでしょ。おかあさんたらブーブー言ってるのよ。月に十冊ってところを八冊ぐらいにへらしてもらえないだろうか。だからさ、私、おこづかいの二千円のうち五百円をおばあちゃんの探偵小説のために寄付してもかまわないうって申し出てるんだけど。

うめ うまいね、史子。でもそんなやさしいことを言って五百万円を狙おうたってそうは問屋がおろさないよ。宝くじの二等にあたった五百万円のうち、お前たち家族に賞金として与えるのは百万円。それも一番演技がうまいと、私が判断したものにあたえ

るのだからね。

史子 おばあちゃん。

うめ え？

史子 私おばあちゃんの探偵小説好きがこうじてこんな茶番を思いついたのかと思ったら、私たち家族に対するおばあちゃんらしい復讐なのね。

うめ 復讐か。ま、そう思ってくれてもかまわないよ。(時計を見て) さて、と。探偵小

説の幕あけた。いや、その前に登場人物、つまり容疑者の紹介だな。ほら、よく外国物の探偵小説に第一頁を開く前に書いてあるじゃないか。ペリイ・メースン、弁護士。デラ・ストリート、その秘書ってね。(氣どって) 田波雄太郎、五〇才、会社役員。

その妻京子、四三才。その息子道彦、二〇才、大学生。その娘史子、十七才、高校生。千鶴、雄太郎の姉、六〇才。その娘ヒロミ、四〇才。

史子 女主人公田波うめ、八〇才！

うめ、女主人公、ということばに満足そうにうなづく。

うめ やるか、いよいよ。

史子 じゃ、下で待機してるわ。おばあちゃん。

史子、出て行く。

うめ、机の上の薬びんをとり上げる。なかからカプセル入りのビタミン剤をとり出し、じっと眺めてからため息をつく。

うめ 毒入りビタミン剤か。ビタミン剤とはかつこ悪いけど仕方ないやな。何しろ八〇才のこの年まで薬といえど、このビタミン剤しか飲んだことがないんだからな。しかし……やっぱり、心臓の薬が毒入りカプセルとすり変わっていた、てな具合の方が、晴れの舞台としてはふさわしい……よし、ペンで書くか。(カプセルにかきつける) シンゾウのクスリ、と。

うめ、芝居がかった動作で薬を飲み、ゆっくりと五つ勘定してから大きくうなって倒れる。少し様子をうかがってから、首を持ち上げ待機している史子に聞こえるようにまた大きくうめく。史子の来る足音がする。うめ、起き上り、机の上の茶わんを倒し、本を五、六冊散らかしてから、倒れ直す。

史子、入ってくる。以下、芝居になるが皆、たいそうぎごちなく下手である。

史子 何か変な声がしたと思ったけれど(うめに気がつき) あら、おばあちゃん、どうしたの(近づいて、うめをゆする) きゃーあ、死んでる!……えーと、ここだとびのく

んだっけ……（とびのいて）皆に知らせなけりゃ……大変よう。（と叫んで出ていく）
うめ 何だろ、あの子。あんな下手じゃ百万円はあげられないね。

史子を先頭に、京子、道彦が出てくる。道彦、うめに駆け寄る。

道彦 おばあちゃん。（だき起こす）あ、本当に死んでる。

京子 ま、道彦、ほ、本当に？（手の中に入れたカンニングペーパーを見て）えーと、ここで近寄る、か。（近寄って）おかあさま。（足のあたりを押す）

道彦 （小声で）おかあさん、頭、頭！

京子 （あわてて、頭の方を押さえて）おかあさま。

雄太郎が、ゴルフのクラブを持って出てくる。

雄太郎 何だか、おばあちゃんがどうしたとか、史子の声がしたんだが……

次は、京子のせりふの番なのだけど忘れてる。皆、顔を見合わす。

道彦 （小声で）おかあさんだよ。（ひじでつつく）

京子 え？ えーと。(つまる)

道彦 (小声で) あなた、大変！ だろ。

京子 あ、そうか。(雄太郎に) あなた、大変！

雄太郎 医者と呼ば、京子。

京子 医者？。

雄太郎 そうだよ、早く。もたもたするな。

京子 (ふつうの調子で) でも……

雄太郎 (ふつうの調子で) でも……何だ。

京子 医者だなんて？ 私たちの一存で勝手に決めてしまっていていいかしら。また千鶴姉さ

んやヒロミさんが……何かおっしゃるんじゃないかしら。

雄太郎 そうだな。それもそうだ。こうつと……じゃ姉さんに相談して。

雄太郎、立ち上がりかける。道彦が押しとどめる。

道彦 だめですよ。おとうさん、芝居を忘れて現実にもどっちゃ。医者と呼ば、京子、
か
らもう一度やり直し。全くいやんなっちゃうなあ。(手まねで、「百万円はだめ」)

雄太郎、京子、もとの位置につく。